The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アメリカ合衆国南西部のスペイン語 : 接続法を通じてみた場合
Author(s)	中岡, 省治
Citation	Estudios Hispánicos. 2001, 25, p. 17-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93847
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アメリカ合衆国南西部のスペイン語
－接続法を通じてみた場合－

中　岡　省　治

1. はじめに

近年とみにアメリカ大陸のスペイン語への関心が高まり，かってはDialectología españolaの下位区分の一つとしての扱いしか受けなかった段階から，現今では，Dialectología hispánicaとして，そこにEl español de EspañaとEl español de Américaの下位分類を設定するといった方向に，世界のスペイン語圏でのそのステイタスについての認識に変化がみられる。スペイン語圏でかってあった，イベリア半島スペイン語を頂点に戴き，その他の地域のスペイン語は，階層化されてその下部に位置付けられる，という考え方は徐々に力を失ってきている。この様な意識を決定的にしたのが，1967年から始まったプロジェクト「イベロ・アメリカ及びイベリア半島の主要都市における教養語の規範に関する共同研究計画」で，これはJuan M. Lope Blanchを中心として，これまで着々とその成果を挙げてきている。このプロジェクトによって，これまでにスペインの主要都市と中南米各国の首都についての教養語，民衆語の資料集が，厳密な学術的精査をへて出版され，現代スペイン語研究のための重要な資料体となっている。

この研究の一環として，「アメリカ合衆国南西部において用いられているスペイン語」についての資料体もJuan M. Lope Blanchによって，*El español hablado en el suroeste de los Estados Unidos, materiales para su estudio*, UNAM, México 1990として出版されている。これはアメリカ合衆国南西部の4地点，テキサス州サンマルコス(San Marcos)，ニューメキシコ州モラ(Mora)，アリゾナ州トゥーソン(Tucson)，カリフォルニア州サノゼ(San Jose)，における言語調査の結果であり，ここで対象となったインフォーマントは，すくなくとも何世代か以前にその地－かってはヌエバ・エスパニャと称した地域－に入植し定住したスペイン語話者の末裔に限られている。したがって，ここで取り上げられているスペイン語は，今の時代に，メキシコやその他の中南米諸国からアメリカ合衆国に入国した移住者のそれではなく，ほとんどがその地で3世代目となるかあるいはそれ以上の世代に属する人々のスペイン語ということになる。編者のLope Blanchはこれを伝統的なスペイン語(lengua española tradicional)と呼んでいる。

以下に，この4地区のスペイン語に関して，資料体の緒言に基づいて少しば

かりの敷衍をしておきたい。

4地区の人口とここでの研究対象となりうるスペイン語話者の割合は，サンマルコスでは，人口が約23,000人，うち50パーセントほどがメキシコ系スペイン語話者であり，モラでは総人口約5,000人で，かつまたそのほとんどがスペイン系でスペイン語話者の子孫であるとしている。ただし，トゥーソン（約35万人）とサノゼ（約60万人）のスペイン語話者人口については，前者2地区のような具体的な数字は示されてはいない。これらの地区や都市の公式の建設は18世紀から19世紀になるが，実際のスペイン系の人々による入植はそれよりもはるかに早かったと考えられている。また，現在では，これらの調査対象地点がおかれている社会・経済的な状況は，相互に大きく違っていて，たとえばモラは，実際は，ニューメキシコ州でも都市部からは離れた地域に位置する農業地帯であるが，トゥーソンやサノゼはもはや大都会である。編者のLope Blanchによれば，トゥーソンでは前述の伝統的なスペイン語がいまだ維持されているが，サノゼではこれが消滅の危機にあって，スペイン語は，メキシコや合衆国の周辺地域から移入するスペイン語話者によって，かろうじて支えられているにすぎないという。

したがって，これら4地区において記録されたスペイン語は，それぞれに相違する社会的状況下にあって行われているスペイン語である。しかし，このスペイン語は，社会言語学的にみれば，公用語の英語の圧力下にあって生き続けている家族語あるいは一社会集団の言語，としての共通性をもつということにもなる。ここで資料体として記録されたスペイン語について，編者Lope Blanchは，言語体系の収縮つまり簡略化の現象を認め，これが語彙の面だけでなしに文法の領域にも現れてきていることを指摘している。

さて，この資料体を一読してみると、そこに記録されたスペイン語に数多くの興味ある現象が現れてきていることに気づく。そこで，本稿では、この特殊な条件下にあるスペイン語の特徴の一端を明らかにするために、動詞体系のなかで接続法の用法を中心に，簡単な考察を行ってみたいと思う。(注1)

2. 資料体から抽出される接続法の諸用例とその分類

以下に前述の資料体から抽出した諸用例を，Real Academia Española, *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Espasa- Calpe, Madrid, 1973の接続法の記述と山田善郎・他『中級スペイン文法』白水社，1995の分類とに基づいて整理してみる。これを通じて，この資料体に記録されたスペイン

語に接続法がどのような形で維持され，あわせてこの領域で標準スペイン語との間にどのような偏差がみられるかを考えてみたいと思う。

3. 接続法を中心とした抽出用例の分類

3. 1 独立文

3. 1. 1. 願望の接続法

いうまでもなくこの意味の領域では接続法が義務的である。動詞活用形のみによってこの意味が表される場合と特別な導入辞(que, ojalaなど)を伴う場合の2つのケースがある(RAE 1973: 458; Borrego et al. 1986: 73-75)。

(1) Válgame Dios, ya...ya no, mi hijita, porque... (306)「お願いやめてよ，お前もう止めなさい... (お腹にこどもがいる)のだからね」(注2)
(2) Tienen un calvario, ¡tan bonito! Vieras qué calvario tan bonito. (180)「そこでは苦行の行列があるのです。本当に素敵ですよ。それがどんなに素敵な苦行かお前に見せたいね」
(3) que Diosito los bendiga (136)「神様があなたがたを祝福されますように」
(4) Si tienen tiempo, ojalá pudieran... (242)「もしあなたがた時間があれば，(そこに行かれたら)いいのですが」

3. 1. 2. 命令の接続法

usted, ustedesを主語にする命令と，二人称に対する否定命令とに接続法が用いられるところ，第三者に対する命令ではque＋接続法現在が用いられているところは，標準語の場合と同じである。

(5) Déjeme ver si me acuerdo. (199)「さあ思い出せるかどうか考えさせてください」
(6) No me lo vayas a dejar a mí en tu testamento. No me lo dejes a mí. (247)「そんなものを私に遺言書のなかに入れて残しておかないでよ。私にそれを遺言書のなかで残しておくなんてやめてよ」

(7) Pues ya, que le quiten la máquina. (109)「もうこうなったら，その装置を外してもらってあげなさいよ」

この部分では，この地域独特の表現で，本来の願望・命令の意味から発展して，今では間投詞的に使われるいくつかの固定表現もある。

(8) (Enc.)(注3) Claro: usted hizo mucho esfuerzo, y ahora les ayuda... −¡Andele! (123)
(質問者)「そうです，あはたはすごい努力をされたうえ，今は彼らを助けておられるのです…」
「そう，がんばってます」

ándale, ándeleは，動作の喚起，同意・同調，驚き・疑いなどの気持ちを表すための間投詞的な働きをするが，この資料体では僅少であった。

(9) (Enc.) −¿Vivía por...?
-¿Mande?
(Enc.)-¿Vivía por aquí también? (239)
(質問者)「あなた…に住んでおられましたか」
「何ですか，もう一度お願いします」
(質問者)「あなたこのあたりにも住んでおられましたか」

¿mande?はメキシコのスペイン語で話し相手の発言を聞き返すため多用される形式で，この資料体でもしばしば用いられている。

(10) Como Tucson es...es un...es una ciudad de...puros...digamos caminantes, hay muchos...muchachas que están casadas con...aa...soldados del...del ejército, (256)「トゥーソンは…まったくの…の，つまり一時滞在の人達の町なので，軍隊の兵隊さんと結婚している女の子が多いのです」

digamosは，メキシコのスペイン語では，一般的な話者をも含んだ一人称複数形への勧告的命令ではなしに，言いよどみ，ためらい，疑い，口ごもりなど，

談話連結の働きで使われる形式になっている。この資料体では使用頻度は低い(Moreno de Alba 1985: 125)。

これ以外に，談話導入辞のfíjese,談話導入・連結辞のo sea(que)にも言及しておく必要がある。同じ談話連結辞の¿cómo (le) dijera?, como quieraなどもある。

3. 1. 3. 疑惑・可能性の接続法

(11) Aquí...posiblemente no *puédanos* hacer mucho con él, porque no está...no es muy vivo. (193)(注4)「ここでは，多分私達は彼には大したことはできないかもしれません，というのは，彼はあまり，あまり元気なたちの子ではないからです」

(12) Quizás si...si ella no...no puede, o lo que sea, quizás también *eia* tenga una idea de alguien otro. (225)「たぶんね，もし彼女がだめで，お役に立てないのなら，たぶん彼女は誰か他の人を考えてくれるかもしれませんね」

(13) Tal vez tengamos un gobernador que sea en un tiempo presidente. (235)「おそらくは，我々はいつの日か大統領になるような知事さんをもつことになるでしょう」

(14) Oh, el dinero en *aqueos* tiempos...fueran tal vez como el doble. (211)「そうです，金は当時では，おそらくは2倍の値打ちがあったのでしょうね」

(15) *Puea* que esté confuso yo en los nombres aquí... (189)「ひょっとしたら私はこの名前では間違っているかもしれません」

(16) yo digo que no *puá*[pueda]que ni los seis meses. (191)「私は6カ月も要らないかもしれないと思っています」

この領域では，叙法の使用が任意で，以下のように疑惑の副詞と直説法が共立する場合も記録されている(RAE 1973: 465)。

(17) Si acaso viene una emergencia, ¿no? de un niño o...enfermo, entonces yo voy allí a la casa de los niños (235)「もしひょっとして子供とか病人とかの緊急事態が起こったら，その時には子供の家に私が行くのです」

(18) Pero si acaso no me retiro ahora, quizás voy a durar cinco o seis años más. (320)「しかしもしひょっとして私が今引退しないというのなら，おそらくはこれから5年か6年はまだ仕事をつづけることになるでしょう」

(19) A lo mejor no me va a pegar. (153)「まあ彼は私たたいたりはしないだろう」

(20) Pero todo *ehte* tiempo...quizás *ea* sabría que eran *mentirah*.(161)「しかしこの間に…彼はたぶんそれが嘘だということを知っていたのかも知れません」

(21) quizás me trataron muy bien. (196)「たぶん私は可愛がってもらったのでした」

3. 1. 4. 譲歩の接続法

同一の動詞の接続法の活用形を二重に重ねて用いて，譲歩を表すことがある。これも資料体に記録されている (RAE 1973: 558)。

(22) Comoquiera *p´atrás*, para...*dale* [darle] poquita información, sea de mi vida o sea de San Marcos... (156)「とにかく前にいったように，昔の生活やら，またサン・マルコスのことやらを，少しばかりお話すれば」

(23) Que una...que una mamá o un papá abusen de los hijos. Ya sea de lo que sea. (231)「母親とか父親が子供達を虐待すること。それがどんな形にせよ…」

3. 2. 従属文

3. 2. 1. 名詞節

3. 2. 1. 1. 願望，命令，要求などの意味を表す主文の支配を受けるとき

(24) ¿Quiere que traiga el libro? (198)「あなたはその本をもってくるのをお望みですか」

(25) Y... y él quería que sus hijos tuvieran escuela. (215)「それで…彼は彼の子供達が教育を受けることを望んでいたのです」

(26) Sí, na más estábanos esperando que nos dejaran pasar allí. (175)「た

だ私達は，中に入れてもらえるのを期待していたのでした」

(27) y para ser juez, necesita que el juez se muera o se retire, para que te pongan *loh* otros comisionados a ti de juez, (160)「治安判事になるには，現判事が亡くなるか，引退するかして，他の司法委員があなたを判事に指名することが必要になるのです」

(28) Es que no les...exigen que hablen español en la casa. (206)「彼らは家ではスペイン語をしゃべるようにとは，強制されていないということなのです」

(29) No la pudieron hacer que más comiera (230)「彼らは彼女にそれ以上食べさせることができなかったのでした」

(30) lo que les *pidía* es que acaben su escuela (108)「私が彼らに頼んでいたことは，彼らが学校を終えることなのです」

この意味の領域では，標準的な用法では接続法が義務的であり，接続法と直説法の叙法の対立は存在しない(RAE 1973: 458-59)。しかし，調査した資料体では以下に挙げるような場合が見られた。また，文(34)では動詞creoをquieroの意味で使っているとの編者からの付記があった。

(31) El quería que...el tractor iba a andar arreándolo arriba...manejándolo muy bien, y no iba a trabajar. (158-159)「彼は，上でトラクターにけしかけて…うまく運転すれば，トラクターが動いてくれるものと思ったし，そうなら彼が働くこともないだろう，と思ったのです」

(32) *Etá*...era una americana y él quería que si la...la americana podía ir a vivir con *nohotros*...*mientrah* que él gradaba y *to* eso.(122)「この娘さん…アメリカ人で，彼はその娘さんが私達のところに来て暮らすことができたらと望んだのです…彼が卒業するまでの間は，ということでした」

(33) y le *pidimos* que quería ser un juez...porque íba*n*os a tener una fiesta (184)「そこで私達は彼に，審査員になってもらえないかと，ちょっとしたお祭りをしますので，とお願いしたのです」

(34) Yo *creó*[quiero]que *eos*...que no *ehtén* como yo...que, en *otrah palabrah*, yo *creó*[quiero]que *eios estudién* y...hagan su escuela bien y to, que *van*[vayan]bien con *l´estudio*. (123)「私は，彼らには…私のようになって欲しくないのです…言い換えたら，私は彼らに勉強してもら

いたいし…それに学校をしっかりと頑張ってほしいということなのです，勉強をしっかりと修めてほしいのです」

3. 2. 1. 2. 情意・価値判断の意味を表す主文の支配を受けるとき

この意味の領域では，従属節には接続法に加えて直説法が現れることも認められていて，以下のように直説法が用いられても，そこには違和感がないようである(RAE 1973.: 457-58; Borrego et al. 1986: 34-36)。

(35) Pero me extraña a mí que *trujieran* esta tierra; porque eran *bloque* grandes (182)「こんな土くれをここにもってきたのは私には不思議に思えますね。こんなに大きな石の塊だったのですから」

(36) porque no *los* gusta que estén las familias separadas. (302)「というのは彼らは家族が離ればなれになるのが嫌なのです」

(37) Y eso es una cosa que es...muy triste: que una persona no no pueda seguir sus principios por...por la economía. (268)「しかしそれはとっても悲しいことですね。人間が…経済的な理由のためにその信条を守っていけないということは」

(38) en Estados Unidos es una... que una cosa muy delicada.Que una mamá o un papá abusen de los hijos. (231)「アメリカではとっても困ったことなのです。母親とか父親がその子供を虐待するのが」

(39) No me acuerdo qué era diferente de *l água*, pero no nos gustó tanto. Nos gustó que no había nada que hacer, que descansamos. (316)「そこの海がどんなに違っていたか私は覚えてません，でもあまり私達はそこが好きになれませんでした。気に入ったのは何もすることがなかったことで，ゆっくりと休めましたから」

(40) Mira, Roberto. Está bueno que, cuando empiece la escuela en septiembre, vas otra vez. (237)(注5)「いいかな，ロベルト。9月に学校が始まるときには，あなたもう一度，学校に行くのがいいですよ」

(41) Que...está *güeno* que la Virgen es la misma, *¿verdá*? Pero se celebra, se festeja en diferentes...fechas. (134)「マリア様が同じなのはいいことです，そうでしょう。でもお祭りというか，お祝いは，別々の日にちになるのです」

なお，用例は少なかったが，直説法とより結びつきやすい，次のような文構造の場合もある。

(42) Pero lo curioso es de que después de que ya era territorio americano, *comencieron* a resistir los rancheros. (181)「しかし不思議なことですが，この土地がアメリカの領土になった後で，農場主たちが抵抗を始めたのです」

3. 2. 1. 3. 疑惑・可能性の意味を表す主文の支配を受けるとき

この意味の領域においては従属節では，接続法が義務的である(BRA 1973: 458)。あわせて，標準的な用法では単独の副詞としてのみ用いられ，接続詞queを従える働きのない tal vezがtal vez que...となって現れることがある。puede(ser)que...に代わるpueda (ser)que...も現れている(Kany 1976: 218-20)。

(43) Y...es muy probable que *ténganos* una posada chiquita. ¿Saben lo que es posada? (133)「それで…おそらくは，私達小さなポサダのお祭りをするでしょう。ポサダのお祭りってご存じですか」

(44) ¡Ya, yo no voy a hablar por él. El quiera si...estuviera, puede ser que viva su vida como quiera y que... (237)「今では，私は彼の代弁をするつもりはありません。もしも…こうだというのなら，そうさせたらいいのです。彼が思うようにその人生を生きたらいいのかもしれませんね…」

(45) Taos queda *pa'l...pue*[puede]que Ocaté quede un poco más al oriente. (209)「タオスはこちらの方で…オカテはもう少し東の方かも知れません」

(46) De manera es que vivo yo...tal vez que yo también llegue a los ochenta.「ですから私は元気にしています，おそらくは私もまた80才までは生きるかもしれません」

標準的な用法ではこの意味の領域では従属節には接続法が義務的になるが，この資料体での複文の使用頻度は小さく，疑惑の副詞による独立文の使用頻度のほうが高いようである。なお以下のように接続法に代わって直説法が現れることもある。

(47) Y pueda ser que...que...estuvimos *aí* hasta las siete, las ocho de la *nochi*, para acabar en los días más pesados. (255)「私達はことによれば…夜の7時，8時までそこにいることがありました，本当にくたくたの日々でした」

3. 2. 1. 4. 主文が否定の意味を表す場合

主節の否定の意味が従属節の表現内容にまでも及んで，そこに話者の疑念を表明しようとする場合が，従属節の接続法であると解釈できるが，抽出用例では，従属節に直説法の場合も多い。こちら直説法では，従属節の内容に対しての単なる否定の判断が表されているだけと見なされる。このような微妙な文体上の違いは，意識されることがなかなか困難なのかもしれない(Borrego et al. 1986: 83-84)。

(48) Pero no...no creo que la voy a agarrar. (320)「しかし駄目でしょう…私はそれをものにできるだろうとは思いません」

(49) y si usted cierra los ojos y lo oye hablar, *usté* nunca iba a creer que ese señor era...japonés. (223)「もしあなたが目を閉じて，その人がしゃべるのを聞いたら，あなたはその人が…日本人だとは思ってもみないでしょう」

(50) Y muchas veces era...no era que no sabían lo que estábamos estudiando. (224)「何度もありました…彼らには私達が勉強しているものが分からない、ということではなかったのです」

(51) y *tos* negaron que no habían hecho *eos* esta cosa tan mal. (192)「するとみなは，自分たちはそんな悪いことはしなかった，と否定していったのです」

(52) Y no le hace qué tanto diga el americano... (158)「それにアメリカ人がどんなにいろいろなことをいおうが彼には何ともないのです」

疑問文が動詞saberの直接補語として従属節に組み込まれた，次のような否定の間接疑問文の場合には，通常は，従属節には直説法が用いられる。

(53) No sé cómo los registran para la escuela. (311)「彼らをどんなにして学校に通うための登録するのか私は分かりません」

(54) No sé como será la palabra. (338)「そのことばがどんなものなのか私は知りません」

(55) no sé qué sería él, pero era uno de...de los *mestros* que estaban cargo más grandes... (192)「彼がどんな人だったのか私は分かりませんが，しかしかなり責任のある立場にある先生の一人でした」

しかし，接続法が現れることもある。この間接疑問文に接続法を用いる形式は歴史的にはかなり早くから現れてきている(RAE 1973: 552, Keniston: 1937: 392; Moreno de Alba 1985: 135; Borrego et al. 1986: 112)。

(56) y *usté*, creo...ha oído del...del grupo LULEC. ¿No? Bueno, no sé qué sea. (156)「あなたはルーレック・グループのことを聞かれたことがあるでしょうね。私はそれがどんなものかは知りませんが」

(57) No sé si *l'hayan* oído mentar. (120)「私はそれが話題になったのかどうかは知りません」

(58) Depende en cuál mes uno esté allá. (278)「それは何月にそこに行くのかで違います」

3. 2. 1. 5 名詞同格節において

名詞節と同格に立つ名詞の意味に応じて，接続法となるか，あるいは接続法か直説法かのいずれかが選択されるか，になる(RAE 1973: 522; Borrego et al. 1986; 110-111)。

(59) Y les arreglan este...por ejemplo...cuestiones de...que no sean criminales (149)「彼らが犯罪人になってしまうような問題を，たとえば，彼らのために…解決してくれるのです」

(60) Y...al principio teníamos *miego* que *l'iba* a gustar (311)「最初は…私達はそれが彼の気に入らないのではないかと心配でした」

3. 2. 2. 形容詞節

3. 2. 2. 1. 関係詞節で，先行詞に疑念・不特定の意味が与えられているとき(RAE 1973: 457)。

(61) Esta semana tengo que ir a buscar un...tres *restaurán* que quieran venir a...o tres grupos que quieran venir...*comía* mejicana y... (156)「今週私は参加してくれそうな3つのレストランか，あるいは参加してくれそうな3グループを探しに出掛けないといけないんです，メキシコ料理の…」

(62) porque...era mi deber de escoger los lugares donde debiéramos..de poner sucursal, y entonces de entrar en negociaciones para adquirir el...el terreno... (255)「というのは…私の仕事は会社が支店を出すべき場所を選び出して，それにあわせて土地を買い付ける…ための交渉をすることだったのです」

(63) Depende en lo que...lo que ande buscando uno (281)「それはものが…各人が求めているものが何かで違ってきます」

(64) te ciudo las niñas y busco alguien que me ayude, (231)「私はお前の子供の世話をしてあげるし，また私を手助けしてくれそうな人をも捜すから」

3. 2. 2. 2. 先行詞が否定されているとき，あるいは潜在的な否定の意味を含んでいるとき

(65) No había personas que...utilizaran...lo utilizara... (266)「…を利用するような…それを利用するような人はいなかった」

(66) No; yo creo que no hay una ciudad que esté...libremente sin...libremente sin...sin perjuicio de alguien. (299)「私は全くの無害の…人の害にならないような都市なんてないと思います」

(67) es una de...la única ciudad que tenga las cuatro...formas de cultura... (263)「ここは4つの…形の芸術文化をもっているようなただ一つの都市なのです」

この資料体では，関係詞の領域でも，規範に則して，先行詞の意味特徴に応じて接続法と直説法とが使い分けされている。しかしながら，以下のように接続法を期待してもいいと思える構造に，直説法が現れる場合もいくつか抽出されている。

(68) Trabajo con las profesoras, le...lo que necesiten, ¿ve?, les arrimo lo

que ellas quieren;(127)「私は女性の先生のところで仕事をしています。先生が必要とされるようなものを…お分かりでしょう，先生方が欲しいといわれるものをもっていくのが仕事なんです」

(69) Y *munchas* veces hago la *mitá* que tenga cebolla y la mitá que no. *Porque* habrá algunos que no les gusta y hay algunos que sí. (198)「私はしばしばその料理の半分をタマネギを入れて，また半分をタマネギを入れないで作ります。というのは，それが嫌いな人もいるでしょうし，また好きな人もいるからです」

(70) y casi no había nada de gente que...que salieron a eso. (310)「それで，そのことのために出てきた人は…誰もいませんでした」

次の文の接続法は，通常は直説法が用いられる場合である。

(71) se me hace que este año que venga va a ser el último año...(294)「私には来年が最後の年になるだろうと思われます…」

3. 2. 3. 副詞節

3. 2. 3. 1. 目的

接続法が義務的なこの意味の範疇では，例外なく接続法が用いられている(RAE 1973: 459)。

(72) y no han terminado la secundaria, así es que en este programa les ayudan para que sí puedan terminar. (317)「それに彼らは中学も終えていないのです。だから，このプログラムでは彼らがそこを終えられるような援助をするのです」

(73) Les daban buen dinero para que fueran y mataran a Fulano y Fulano, y...ya se quedaban con todo. (227)「そんな人達は彼らに大金をやって，あの人やこの人を殺しに行かせて，次には，何もかも自分のものにしてしまったのです」

(74) El restaurante este, aquí, *jue selectao* para que *juera* allá a...a *cocinear* comida mejicana. (155)「ここのこのレストランが，あちらに行って…メキシコ料理をつくるようにと，選ばれたのでした」

(75) Lo mandaron a que llamaran a este... al más chiquito. Es que querían

sacalo p'afuera. (173)「みなは彼に，その一番小さい子を呼びに行かせたのです。みなはその子を外に連れ出そうとしたということなんです」

3. 2. 3. 2. 条件

この意味を表す接続詞(句)，たとえば，como, a condición de que, con que, con tal de que, en caso de queなど，と接続法の組み合わせは，調査の資料体にはみられなかった。

条件文として，条件節と帰結節とからなる文構造みると，とくに非現実条件文では標準的な「接続法過去/過去完了ー直説法過去未来/過去未来完了」の組み合わせよりも，以下に挙げるような時制の組み合わせが多くみられた(RAE 1973: 472-75; Keniston 1973: 414-41; Borrego et. al. 1986: 160-61)。

(76) Pero...si yo fuera *usté*, yo no me iba a esperar hasta el verano, (221)「しかし…もし私があなたなら，夏までは待つことはしませんでしょうね」

(77) ¿Escribir? Pudiera yo escribir si quería, pero ese...ese escrito me lo dio un amigo, (208)「物を書くですって。私は書こうと思えば書けるでしょうが，しかし，その記事は友達が私にくれたのです」

(78) Una clase va un día, otra clase va otro día. No, si fueran todos a un tiempo, no caben. (140)「1クラスの子供がある日に行くと，別のクラスはまた別の日に行くのです。もし子供みながいちどきに行ったとしたら，そこには入りきりません」

(79) pero nosotros decíamos que...que se apuró poquito. Se *biera* [hubiera] esperado unos a...como unos diez años más, entonces *biera* tenido más, pero... dicen que sí tiene *chanza* [chance] pero tuviera más si se esperara unos diez años más. (235)「しかし私達は彼が少し急ぎすぎたといっていたのです。そうです，もう10年ぐらい彼がじっと待っていたら，そのときにはもっと多くの機会があったことでしょうに。また，今も機会はあるということですが，しかしこれから10年ほど待つのなら，きっともっと多くの機会に恵まれることでしょうが」

(80) Si estuviera a cincuenta bajo de cero, yo creo hubiera sido lo mismo. (322)「もしかりに温度が零下50度になったとしても，私は同じことだっただろうと思いますよ」

3. 2. 3. 3. 否定

この意味を表す接続詞(句)では接続法が義務的に現れる。

(81) No; ahí, ahí...*pos*...*pos* todo es inglés, a no es que agarre lecciones en español, en *Spanish scholl* (105)「いいえ違います，そこではみな英語です。もっとも，スペイン語学校で，スペイン語での授業を受けるときはちがいますが」

(82) pero dura (la piedra) en una forma de que *pue* uno *ponela* muy alta, sin que se *esgrane*.(182)「しかしそれ(石)は，高く積んでも砕けてしまわないほどに硬いのです」

3. 2. 3. 4. 譲歩

この意味の領域では，接続法と直説法の叙法の対立が可能で，資料体でもこの二つの叙法が用いられている(RAE 1973: 557-59; Borrego et al. 1985:166-69)。

(83) Cada cierto tiempo tengo que ir, aunque sea aquí, a Nogales. (249)「どれくらいかに1回は，たとえ近くであっても，私はノガレスに出掛けないといけないのです」

(84) Aunque yo sea también americano, no me dicen americano a mí. Los mejicanos. (282)「私もまたアメリカ人であるのに，私はアメリカ人とはいってもらえません。メキシコ人からはね」

(85) Yo yo ya ya pasé de...de...ya no aprendo más. Aunque siempre me mandan al colegio, ¿no?, de mi trabajo. (231)「私は，私は，年を取って，もうものを覚えられなくなりました。まだまだ私の仕事関係の学校へやられるのですけれど」

3. 2. 3. 5. 時

時について未来に言及する場合に接続法が用いられるという原則は有効に作用していると思われる。しかしながら，接続法が期待される条件にあるといえるような場合でも直説法が現れていることが，多々観察される(RAE 1973: 540-41)。

(86) Cuando vaya allá enfrente, ve el...ve el...puede ver el...tengo el retrato de nosotros (150)「あなたがあそこのま前に行かれたら，あなたは…を目にされるでしょう，私達の写真があって」

(87) Un día te llevo, antes de que me muera te llevo *pa* que mires. (107)「いつかお前を連れていくから，私が死ぬまえに，お前に見せるためにお前を連れて行くから」

(88) Oh, sí, eso fue... hace muchos años; antes que yo me casara. (121)「ああそうでした，そんなことありました，何年もまえにね，私が結婚するまえですが」

(89) Uh, madre, yo nunca me *vo* a mover de aquí. Me voy a estar contigo hasta que tenga cuarenta. (111)「とんでもないお母さん，私はここから絶対に出て行きませんよ。40才になるまで一緒にいますからね」

(90) veinte dólares el día, desde un...desde que salga el sol hasta después de que se mete el sol, por veinte dólares. (159)「1日20ドルです，日が出てから日が沈んでしまうまで，20ドルでです」

3. 2. 3. 6. 場所

仮定性と事実性との対立が，接続法と直説法で表されている(RAE 1973: 537)。

(91) pero él nos hacía bajar, lejos, donde no fuera a vernos el padre (173)「しかし彼は私達を降ろしたのです，離れた，神父さんが私達を見かけないようなところに」

(92) Eso es más onde están empleados la gente. (220)「そこが人々が一番沢山で仕事をしているところです」

3. 2. 3. 7. 方法・様態

仮定性と事実性の対立が，接続法か直説法かの選択で示される(RAE 1973: 541-43)。

(93) Como...cuatro o a lo mejor cinco. Depende como maneje. (309)「4時間ぐらいかもしかしたら5時間です。運転の仕方で違いますが」

(94) *Ora* viene esta gente de Méjico a trabajar aquí, que ya está ¡lleno! aquí de tantos, pues los explotan como no crea *usté*. (159)「今はここにこの人達がメキシコから働きにやってきます，彼らで一杯です。ここには本当に沢山います，でもあなた考えられないくらいに搾取されているんですよ」

(95) *Hí*, pero no...no como quisiera *usalo*. Pero como los güeros piensan que lo soy... (281)「ええ，しかしそれを思うがままに使うというわけにはいきませんね。でも，白人は私がそうだと思っているのですよ」

3. 2. 3. 8. 比較

仮定性と事実性の対立が，接続法か直説法かの選択で示される(RAE 1973: 541-43)。

(96) como lo que es un Shopping Center, que nosotros nombramos aquí; moderno, con todo igualito que si estuviéramos aquí de este lado. (145)「ショッピング・センターと我々がここで呼んでいるようなものもあるのです。近代的でね，こちら側にいるのと何も変わりませんよ」

(97) Ellos hablan un poco; no tanto como yo quisiera que hablaran, ¿no? (223)「彼らは（英語を）少しだけしゃべります，でも私が願っているほどには上手ではありませんね」

(98) mi papá...si nosotros le hablábamos el...en inglés, él se hacía como no lo...no lo podía oír. Y teníamos que hablarle español a él. (223)「私の父は，もし私達が英語で話しかけたら，そのことを聞き取れないようなふりをしたのです。ですから私達は父には，スペイン語をしゃべらないといけなかったのです」

4. 用例についてのいくつかの考察

以下に資料体にみられたいくつかの現象について簡単な分析を行っておきたい。とくに，他のスペイン語圏とは隔てられた地域にあるスペイン語に，どのような規範的な体系からのずれがあるかを観察しておきたい。

4. 1. 名詞節

(99) ¿*Pos* qué culpa tenemos nosotras que no aprendieron? (105)「あなたがたが(スペイン語を)習わなかったからといって，私達にどんな責任があるのですか」

名詞culpaと同格構造をなすこの名詞節では，直説法と接続法の選択は任意で，接続法hayan aprendido, aprendieranの使用も可能である(Borrego et al. 1985: 39-40; RAE 1999: 33. 3. 2. 8.)。ただし直説法では，「勉強しなかった」ことを事実とみているので，結果としてculpaに「責任・罪」といった重い意味の共示が生じるようである。

(100) y yo no quería que se fuera; le dije que se...siga conmigo. (116)「でも私は彼には出ていってもらいたくなかったのです。彼に，私と一緒に…ずっといてくれるようにといったのです」

主文の意味特徴から接続法の使用が義務的となる。時の一致によってsiguiera(-se)が求められるが，直前の(...)の存在が現在形のsigaをも可能にしているといえる。

(101) (娘さんと付き合いたいと許しを求めてきた男性に父親がいったことば) Nomás cuando salgas, *nohotroh ehtamoh* a qué *horah* la traigas y a qué hora la levantes; *to* eso. La *traigah p´atráh*. (122)「ただこのことだけ，つまり君が出掛けるときには，私達が決めておくのは，君が何時に彼女を送ってくるか，迎えにくるかということなんだ，そのことなんだよ。君が彼女を家まで送ってくることだな」

通常は，疑問文が補語となって上位の文に組み込まれた場合には直説法が選ばれるが(RAE 1999: 35. 5 1.)，ここでの接続法traigas, levantesは，主文が表す「不安・期待」などの意味の支配を受けて選ばれた形，と説明されるであろう。後文のtraigah(=traigas)は前文の意味の支配を受けて，願望－命令的な意味を表している。

(102) Porque yo no *quero* que han...como yo, con...trabajando como yo tan

duro ansina. (123)「というのは，私は，彼らが私のようになって…こんなに辛い仕事をすることなど，望んではいないのだ」

主文の意味の支配を受けて，接続法が義務的となる場合である。したがって，hanは seanとなるべきであろう。なお，hanはsean>s'an>san>hanと変化した結果の形であろうか。

(103) vas y aplicas por un trabajo...si...si *juera* por...por credenciales, por...una forma que llenaras y no le pusieras el nombre, entonces *taba*[estaba]bien que ibas a ver a quién ibas a agarrar. (158)「誰かがある仕事に応募したとする…もし身上書をもっていって，その用紙に書き込みはしても，それに名前を書かなかったとしたら，そうしたら，こっちが誰を雇ってもそれはそれでいいということになるのでしょうね」

主文(taba bien)の意味が，価値判断的なものからかなり希薄になってしまっていて，これが接続法を選択させるだけの働きをしなかった場合と考えられる。そこで，直説法で，後時性だけを表す形が選ばれたのであろう。スペイン語話者の直感では，この文脈でfuera a ver...とする必要はないようである。

(104) Y muchas veces era...no era que no sabían lo que estabámos estudiando.(224)「何度もありました…彼らには，私達が勉強しているものが分からない，ということではなかったのです」(→(50))

主文が否定されている場合に，原則的には，その否定の意味が従属文の発言内容にまで影響を及ぼす場合には，接続法が用いられる。しかしここでは事実をそのままに述べる場合として，直説法が選択されている (RAE 1999: 49. 4. 1)。

(105) Pero lo curioso es de que después de que ya era territorio americano, *comencieron* a reisistir los rancheros (181)「しかし不思議なことですが，この土地がアメリカの領土になった後で，農場主達が抵抗を始めたのです」(→(42))

lo curioso es que...は, es curioso que...よりも事実性に傾斜した意味内容を表す形式なので, このタイプの構造が主文になる場合には, 直説法が選択されることが多くなる。ここでは接続法のcomenzaranも可能であろうが, それよりも先時性を明示するhubieran comenzadoの方が好まれるようである(RAE 1999: 44. 6. 4)。

(106) Y pueda ser que...que...estuvimos *aí* hasta las siete, las ocho de la *nochi*, (255)「私達はことによれば…夜の7時, 8時までそこにいることがありました」(→(47))

主動詞部の意味特徴に対応して, 従属動詞は接続法のestuviéramos(-ésemos)が選択されるべき場合である。しかし, 前出(100)と同じように, ここでも(...)が主文の表す「疑惑・可能性」の意味の支配を希薄にしてしまっているといえる。

(107) Nos gustó que no había nada que hacer, que descansamos. (316)「私達気に入ったのは何もすることがなかったことで, ゆっくりと休めましたから」(→(39))

主動詞nos gustóの意味「気に入った・よかった」の支配を受けた場合, 従属節では接続法と直説法が任意になるが, ここでは事実だけを述べる直説法が選ばれている。接続法hubieraとすることも可能であろうが, 具体性が希薄になるようである。

4. 2. 形容詞節

(どこの教会へ行っているかという問題についての話で)

(108) No, *pueh* el que...el que sea de su religión, va; el que use ir. El que quiere cambiar, *cambea*. (115)「各人が, それぞれの信仰の人が, (そこの教会に)行くのです, いつも行っている人がね。教会を変えようという人は, 変えたらいいのです」

文脈的には疑惑, 可能性の意味が感じ取れないが, ここではsea, useが使われている。したがって, の接続法を直説法に置き換え, 直説法で全文を表現す

るのが自然であるという，スペイン語話者の意見もあった。ここでは，話者が疑惑の意味を先行詞に込めようとしたための接続法の使用であろう。ただ，ここで上述のような意味が等位構造で表現されている場合，その等位構造の内部で叙法の交代があるのは不適切，なのではないだろうか(Moreno de Alba 1986: 126-27)。

(109) Hay muchos restaurantes mejicanos aquí. Onde quiera que va, hay...
(116)「ここには沢山のメキシコ料理店があります。どこに行っても，あるのです」

ここでは，先行詞の示す不定性からみても直説法は認められず，接続法が義務的になる場合である。

(110) (Enc.)-¿Y trabajan(los cubanos)en...el campo o qué?
– *Pos* donde... donde hay también asi...donde puedan. (134)
(質問者：すると，キューバ人は畑でかあるいはどんな仕事をしてるんですか)
「まあそう，仕事がありそうなところにね，どこか働けそうなところならね」

もし上記のような解釈が許されるのならば，donde hay...の部分をdonde haya (trabajo)とすれば，文脈的にも無理のない文が得られるであろう。

(111) si no iba tu mamá, *ps* iba una vecina...alguien iba que te cuidaba.
(176)「もしお母さんが一緒に行かないのなら，近所のおばさんか…子供の付き添いをする誰かが行ってくれたのです」

文脈的にもalguienに不定性を想定して関係代名詞節の動詞を接続法cuidara (−se)にするのが通常の表現形式であろう。

(112) Y había un hombre que se llamaba Holman, que saliera ministro de no sé qué. (185)「またホールマンという人がいまして，その人は何かの大臣になりましたね」

salieraは直説法完了過去の意味で用いられている場合で，salióを使うのが通常の表現の形式である (RAE 1999: 50. 1. 6. 2)。

(113) así es que hicimos un poste para el dieciséis de septiembre , y casi no había nada de gente que... que salieron a eso. (310)「というわけで，私達は9月16日のために柱を立てたのですが，そのことのために出てきた人は…誰もいませんでした」(→(70))

先行詞が否定語の場合であり，接続法が義務的に用いられるべきである。ここでも，(…)が，その否定の意味の拡がりを中断してしまって，その結果として使用された直説法といえるようである。

4. 3. 副詞節

(114) porque...que no quede por nada.Porque *estudeen eos* y *to* eso. (123)「足らないものがないように(私がみているのです)。彼らが勉強してくれるようにということだけなのです」

porqueが接続法を従え「目的」の意味を表す場合で(Seco y Hernández 1999: 258)，表現の形式としては古風な言い方になる。

(115) Este teléfono que está acá es de la Cruz Roja; es el que uso yo para...cuando hay un desastre o algo... (164)「ここにある電話は赤十字のものです。災害などがあるときに私が使うものなのです」

ここではcuando以下に未来性・可能性の意味を想定せず，直説法を使っている。しかし，接続法を用いてcuando hayaとすることもできるであろう。

(116) *Ps ponián* muchos *blanquios* en un...en un trasto, ansina, y...*ps* pasaba *pa* que agarraban *toos pa* que...su *blanquío*... (178)「お盆に沢山の卵をのせて，みなが自分の卵を取れるようにそれを回していくのでした」

pa que (= para que)が目的の意味を表しているので，接続法が義務的になる場合である。

(117) Cuando no vienen *eos*...digamos que tengan *eos* que hacer y no *puen* [pueden] venir, mi esposo y yo salimos.(199)
「彼らが来ないとき，つまり仕事があって来れないときには，私達は出掛けるのです」

文脈的には事実をいう直説法が用いられてしかるべきであるが，接続法tenganを用いたのは，digamos que...で「…かなあ」と疑惑・可能性の意味を表そうとしたと考えられる。ここでも，(108)で言及したように，cuando節の内部は等位構造になっているので，叙法は直説法に統一すべき場合といえるだろう。

(118) Pero no sufre la gente por las nieves que caen, porque están preparados para...venga...cuando viene el tiempo...que esté nevando. (204)
「しかし人々は雪の被害を受けはしません。そんな天気の，雪の降るような時の準備はしていますから」

文脈的に事実を述べている場合とも考えられるが，直後のesté nevandoに合わせて，cuando venga...とすべき場合であろう。なお先行のvengaは談話連結辞的な働きをしている。

(119) habían entrado...yo creo que...como un año antes de que llegamos nosotros y estaban muy bien fortificados, y *ai* hubo varias batallas hasta que...perdieron, pues. (255)「私の思うところ，彼らはすでに，私達が来る前の一年ぐらい先にやって来ていて，防備をしっかりと固めていたのでした。それから何度か戦争があって，ついには彼らが負けた，ということです」

時について潜在的な否定を含むantes de que節の動詞の叙法は接続法が義務的であり，llegáramos (-ásemos)となるべき場合である。

5. まとめ

以上「アメリカ合衆国南西部において用いられているスペイン語」に関する資料体に基づいて，動詞接続法の用法を中心に簡単な考察をおこなった。冒頭にもあげたように，ここでのテーマは，とくにアメリカ大陸のスペイン語に指摘される特徴としての，文法体系での簡略化がみられるかどうか，ということであった。これに対する答えとしては，資料体の示すところをみるかぎり，接続法は，直説法に対立する叙法として完全に維持されている，といわねばならない。これは，機能面で，伝統的な分類項目のすべてに対応する用法が記録されていることからも証明される。また，この二つの叙法が同一の意味の領域において，たとえば仮定性と事実性とに対応して，相補的に機能をしていることも確認できる。ただし，具体的な言語事実としては，接続法過去では-raのみが現れ-se形が記録されていないこと，接続法未来もまた現れていない，という事実がある。しかしこれは，資料体の4地域にだけ特有の現象ではなく，現代スペイン語に幅広く指摘されている事実である。

とはいえ，これらの観察の結果を，資料体が対象としている4地区に，等しく一般化して当てはめることは適当ではない。というのは，各地域のインフオーマントの間で接続法の利用率に大きな差がみられるからである。たとえば，動詞定形全体のなかでの接続法の出現度数を調べてみると，アリゾナ州トゥーソンのインフォーマントI(女性45歳，大卒：pp. 215-225)の場合では，接続法使用頻度はわずか12／433であるが，これに対して，インフォーマント2(女性55歳，中卒：pp. 226-238)の場合は，75／749にも達している。また，カリフオルニア州サノゼでは，インフォーマント1(男性34才，大卒；pp. 273-283)とインフォーマント5(男性56才；pp. 319-331)では，それぞれ，10/301と8/375とであり，いずれもその使用率が低い。このような結果をみても，また資料体編者のLope Blanchが指摘しているような，各地域の歴史的・社会的背景やインフォーマントのスペイン語能力を考慮するとき，少なくとも接続法の維持あるいは後退の問題は，各インフォーマントの個人言語にかかわる現象として取り扱うべきもの，と思われる。

なお，これらのスペイン語内部の問題とは別に，インフォーマントの発言を通じて，それらの地域にヒスパニック系米国人として住む人々のルーツの問題，日々の生活感情，職場や家庭での人間関係などを読みとることができる。これもまた，この資料体がみせるもう一つの興味ある側面，といえるであろう。

注記

1) なお，この資料体は、モラは4人で，その他の3地域は5人のインフォーマントから成る計19人（男性9人と女性10人）のスペイン語話者との，30分の自由テーマでの対話を転写記録したものである。この資料の収録は、1985年12月から1986年10月にかけて行われている。

2) 抽出の用例はインフォーマントの発言からに限っている。また筆者が留意したいと考える動詞形式はゴジックで示した。抽出用例の末尾の（　）内の数字は資料体の当該ページを示す。なお，用例には「　」の訳文を付した。また，資料体では，3点符号（...）によって，話者のためらい，口ごもり，などによる発言の中断が示されている。

3) 資料体では質問者を（Enc. = encuestador）で示している。

4) 資料体ではイタリックで，それが標準語の語形でないことが示されている。

5) 資料体で直接話法によって話者あるいは第三者の発言が伝えられているとき，そこに使われている発言の動詞を含む伝達部は用例からは除外した。たとえば，“¡Ay no! -le dije yo－. Llévalo” (237)のような場合のことで，ここでは，“¡Ay no! Llévalo”として挙げた。用例（40）でも，第1文と第2文との間に－le digo－:が入っている。

（なお，本稿を作成するにあたっては，Eloísa Valera 氏，Germán Arce 氏，Claudio A. Vásquez 氏から色々と貴重なご教示を頂きました。このことを記して感謝を申しあげます。）

資料文献

Lope Blanch, Juan M.(1990): *El español hablado en el suroeste de los Estados Unidos, materiales para su estudio*, UNAM, México.

参考文献

Alvar, Manuel(Director)(1996): *Manual de dialectología hispánica, El español de América*, Ariel, Barcelona.

Borrego, J.; Asencio, J. G. y Prieto, E. (1986), *El subjuntivo, valores y usos*, SGEL, Madrid. (Borrego et al. 1986 として本稿に引用)

Kany, Charles E.(1976): *Sintaxis hispanoamericana*, Gredos, Madrid.

Keniston, Hayward(1937): *The syntax of Castilian prose, the sixteenth century*, The University of Chicago, Illinois.

Moreno de Alba, José G. (1985): *Valores de las formas verbales en el español de México*,

UNAM, México.

Porto Dapena, José A. (1991): *Del indicativo al subjuntivo, valores y usos de los modos del verbo*, Arco/Libros, Madrid.

Real Academia Española(1973): *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Espasa-Calpe, Madrid. (RAE 1973 として本稿に引用)

——————— (1999): *Gramática descriptiva de la lengua española* 1, 2 y 3 dirigida por Ignacio Bosque y Violeta Demonte, Espasa Calpe, Madrid. (RAE 1999 として本稿に引用)

Richard, Renaud(Coordinador)(1997): *Diccionario de hispanoamericanismos no recogidos por la Real Academia Española*, Cátedra, Madrid.

Saralegui, Carmen (1997): *El español americano*, Universidad de Navarra, Pamplona.

Seco, Manuel y Hernández, Elena(1999): *Guía práctica del español actual, diccionario breve de dudas y dificultades*, Espasa, Madrid.

Tobegy, Kund (1953): *Mode, aspect et temps en espagnol*, Ejnar Munsgaard, Copenhague.

Vaquero de Ramírez, María(1996): *El español de América*, I y II, Arco/Libros, Madrid.

Villanueva, Tino(Compilador)(1994): *Chicanos, antología histórica y literaria*, Fondo de Cultura Económica, México.

福嶌教隆(2000)「『スペイン語記述文法』における叙法の取り扱いについて」日本ロマンス語学会第38回大会口頭発表原稿。

山田善郎・他(1995)『中級スペイン文法』白水社。